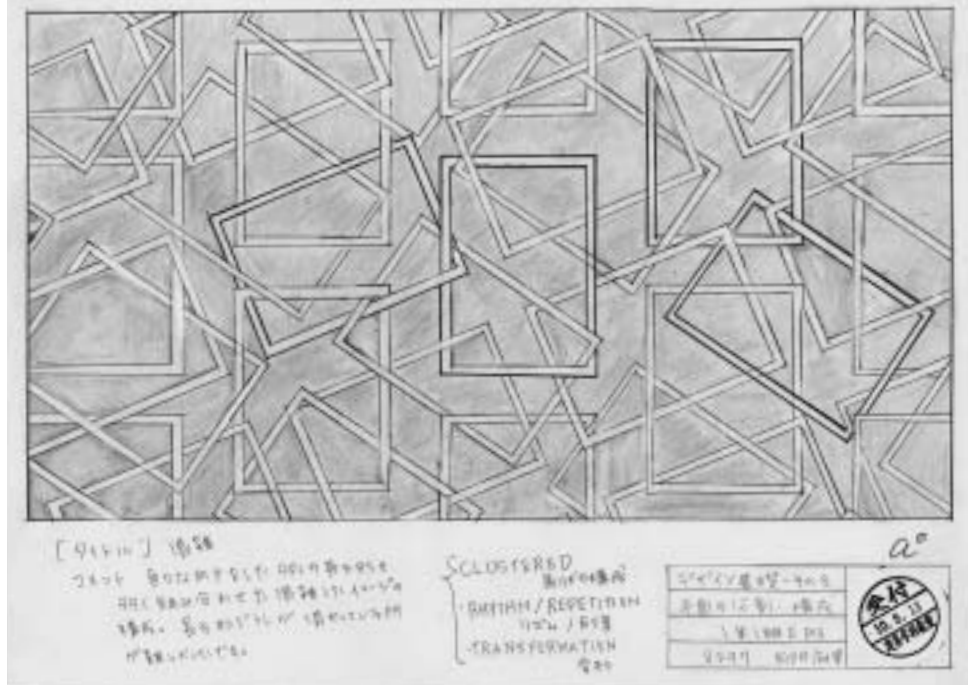


遠藤 直子



柳井 麻里

## デザイン基礎 I

### 第1課題 平面の分割・構成

#### 1年1組

担当：  
柳田 武  
小石川 正男  
上利 益弘  
前田 光一

#### 1年2組

担当：  
石田 道孝  
宇杉 和夫  
佐藤 光彦  
横山 聡

で目標としたことは、平面の中で立体的なものを表すということであった。その結果できあがったのが、直線定規だけを用い、すべてを直線で描いた「東京タワー」である。また、幾何学的模様として同じ作業を反復することで「万華鏡」を描いた。

#### 指導=小石川 正男

さあ、いよいよ「デザイン基礎・建築設計」の勉強がスタートしました。

第1課題は「平面の分割・構成」です。入学して間もない時期にはじめて自己表現する課題ですが、多くの学生諸君はまだ丁定規や三角定規、コンパスなどの製図用具に悪戦苦闘の状態だったと思います。

基礎造形としての平面構成は2次元の世界、すなわち平面の表現にとって大切な基礎的能力を身につけることに目標がありますが、紹介する遠藤さんの作品は「自分の周りの世界(万華鏡)」と「自由(東京タワー)」という2つの身近なテーマに対して、直線と曲線の組み合わせを駆使して丁寧な作図・表現を完結した秀作として評価します。遠藤さんのコメントにあるように、重なり合う線が生み出す立体感や鉛筆の表現ながら色彩を意識した表現内容が、テーマに忠実な表情として効果的な作品となりました。

学生諸君には、戸惑いの中で紙の上でグラフィカルなデザインを追求したり、テーマと表現さ

れたものの不一致な点があったことを付け加えておきます。でも、これからですよ。

#### 柳井 麻里

この課題では、長方形というシンプルな形を横に一方、斜めに二方向と各方向に規則的に並べることにより「混雑」というイメージを表現した。

また、まわりを黒く塗ることによって、一つ一つの線を強調させ、さらに何本かの長方形の線を濃く描くことによって連続性のある平面に変化をもたせた。これらは、当初考えた以上に面に表情を付けることができ、視覚的にも楽しめるものとなった。

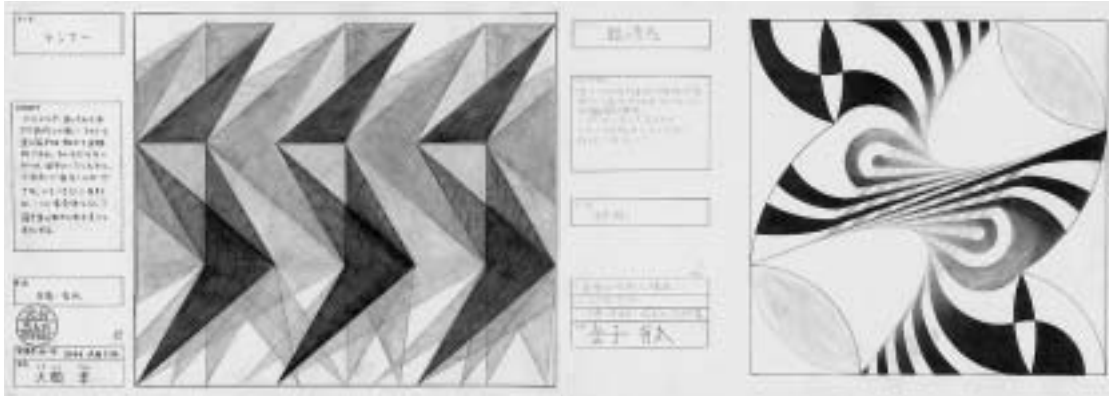
#### 【1組】

#### 遠藤 直子

この課題において私が自分の中

大類 章

金子 有太



も生ずるように見えてくる。地と図の関係を波紋と湧出、明と暗で表現し、「心の奥」を表現する曖昧さ不規則性を添えており、単純な図形に見えるがなかなか味わい深い作品である。

西村 敦

指導=八藤後 猛

平面をいくつにも区切り、別の平面を構成していくという課題の意図を理解し、それを実践できた作品である。線と線のからみ方は単純であり、そこから構成されてくる空間も平凡なものである。

しかし、この作品は構成を引き立たせるため、強引に立体感を出すといったこともなく、きわめて控えめである。そのためには、さまざまな試行を繰り返したものと思われる。完成度は高く、端正にまとめあげられていることが評価される。

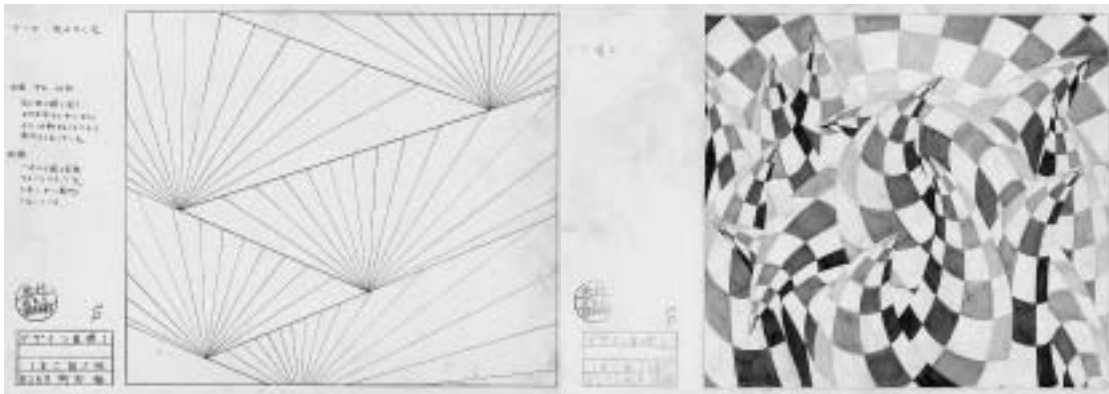
高橋 令奈

西村 敦



町田 裕

松尾 綾輔



町田 裕

指導=宇杉 和夫

傘が逆となった放射状の線の単純な反復である。私はこの作品を高く評価しました。平面の空間構成の成果がそのままそこに広がる三次元の空間構成に連続して広がっている。焦点を結ぶラインは単純な厳正さに空間を律し、上部に隠れていく放射線は無限の広がりとその上部の世界からの明かりによるメッセージを感じさせる。これに手を加えると価値を落としていくことになると思えます。

町田君は繊細な空間の目標を立てて進める、指導する側としては楽しみな学生である。しかしその繊細な目標は、自己の明確な確認が保たなければ持続し展開し難い面もあります。

指導=前田 光一

平面構成の目的は二次元の造形、すなわち平面表現の基本的な能力を身につけることにある。この課題では、テーマと構成意図の提示を求め、技術力と同時に造形の構想力も試された。柳井さんの作品は、同等の長方形フレームを三つの軸線上に配列した極めて簡潔な構成であるが、フレームが重なり、絡み合うことで三次元的な奥行きと錯綜した視覚効果を生むことに成功しており、優れた構想力と美しい造形を示す洗練された作品となった。

指導=佐藤 光彦

建築学科に入学して最初の創作課題となった「平面構成」であるが、あるテーマに対して抽象的に表現することに慣れていないためか、多くの学生が何から手をつけ、どのように表現したらよいか戸惑っていたようだ。その中で大類さんの作品は課題の主旨を的確に把握し、限られた線と面の組み合わせによって、走っているランナーの動き、あるいは競い合う複数のランナーの姿を巧みに表現している。

金子 有太

指導=横山 聡

「構成」は、形体や色彩という造形に普遍的に存在する要素を

用いて、色彩感覚や、造形に対する鋭い感性を養うことを目標とする。造形の基礎となる能力を養い訓練するという点で、すべての芸術・デザイン表現のベースとなる理念である。

この課題で注意しなければいけないことは、装飾様式や伝統的な具象主義に陥らないことである。装飾紋様やパターンは原始時代から無数に生み出されてきたのであるが、ここで求められることは、作者の主体性を表現する内容の主題性を明確にすることである。「芸術作品=平面構成作品」にできるかどうかはこの点にかかっている。内容の主題性がはっきりせずに単調なパターンが繰り返し=「装飾」になってしまっているもの

も多く見受けられた。

金子君の作品は、ダイナミズムやスピード感を持ち、限定された紙面を越えるスケールの大きさを感じさせ、立体=三次元空間にも見える視覚効果によって素晴らしい造形表現となっている。

高橋 令奈

指導=石田 道孝

正方形の市松模様を曲面の上に乗せれば変化のある流動的な空間が表現される。曲面がある特徴的な形を持っていれば、その流動性は加速する。平面構成といってもその中に立体即ち三次元空間が含まれていることを示す典型的な案である。ただこれ以上描いては絵になってしまう。この案でも描いている絵の面白さはあって平面構成の抽象的な深さの魅力が失われ始めている。それを松尾君は市松の「濃淡」によって乗り越えた。

【2組】

大類 章